

日本皮膚科學會名譽會頭

土 肥 慶 藏 博 士

Prof. Dr. Keizo Dohi

1866—1931

皮膚科泌尿器科雜誌第31卷第11號分刷

Reprint from Japanese Journal of Dermatology
and Urology, Vol. XXXI, No. 11.



日本皮膚科學會名譽會頭
故 土 肥 慶 藏 博 士
Prof. Dr. Keizo Dohi
1866—1931



多數ノ花環ヲ以テ飾ラレタル告別式場前景

Die Vorhalle des Aoyama Saijō für Dohis Begräbnisfeierlichkeit mit vielen Blumenkränzen geschmückt.

Le parvis du Aoyama Saijō pour les funérailles de Dohi, décoré de beaucoup de couronnes de fleurs.

The foreground of the hall, Aoyama Saijō, for Dohi's farewell service decorated with many garlands of flowers.



淨土宗管長大僧正道重信教師ノ焼香ト諸僧ノ讀經

Weihrauchopfern durch den buddhistischen Erzbischof Rev. Michishige während der Rezitation der buddhistischen Schriften durch die Priester.

Brûler de l'encens par l'archevêque bouddhiste Rev. Michishige pendant la récitation de l'Écriture sainte par les prêtres.

Incense-burnig by Buddhistic Archbishop Rev. Michishige in course of chanting the Buddhist scriptures by priests.



祭場ニ於ケル未亡人ノ焼香ト諸僧ノ讀經

Weihrauchopfern der Frau Dohi während der Rezitation der heiligen buddhistischen Schriften.

Madame Dohi brûle de l'encens pendant la récitation de l'Écriture sainte bouddhique.

Mrs. Dohi's incense-burning in course of chanting the service.



參拜者告別式場ヨリ歸ル

Die grosse Menge der Teilnehmer bei Dohis Begräbnisfeierlichkeit.

La foule d'homme, participant aux funérailles de Dohi.

The crowd of attendants at Dohi's farewell service.

先生藏慶肥土頭會譽名

先生ハ舊府中ノ藩醫石渡宗伯氏ノ二男トシテ、慶應2年6月9日福井縣、越前、府中松原ニ生ル。長ズルニ及ビ先妣橋本氏ノ弟、陸軍々醫正土肥淳朴氏ノ養嗣子トナリ、其姓ヲ冒サル。

先生ノ實家石渡氏ハ累世醫ヲ以テ越前府中ノ藩主本多侯ニ仕ヘ、曾祖父三世宗伯ハ本草學者トシテ令名アリ。先考五世宗伯モ亦壯年京都ニ遊ビテ、新宮涼庭、日野鼎哉等ニ學ビ家名ヲ揚グ。

明治12年首席ヲ以テ郷里ノ小學校ヲ卒ヘ、13年1月齡15歳、笈ヲ負ヒテ名古屋ニ至リ、土肥氏ニ留ルコト3ヶ月、次デ實兄秀實ニ從ヒテ東上シ、5月下谷進學舎ニ入リテ獨逸語ヲ修メ、9月東京外國語學校ニ入學シ、11月兄弟共ニ東京大學醫學部豫科ヘ入學、18年豫備門ヲ卒ヘテ醫學部本科生トナリ、明治23年1月新大學令ニ據ル帝國大學醫科大學卒業、醫學士トナル。

在學中「外科汎論」ヲ著ハシテ才名一時ニ喧傳ス。

卒業後直チニ第一醫院外科醫局ニ入リテ教師スクリバ氏ノ助手トナル。25年3月更ニ大學院ニ入り、三浦(守治)、村田、宇野、佐藤(三吉)諸教授指導ノ下ニ外科一般竝ニ癩ノ病理及療法ニ關スル研究ヲナス。26年3月大學院ヲ退學シ、同5月獨逸ニ遊學シ、ハイデルベルグ大學ニ入り、チエルニー氏ニ就キ外科學ヲ修ムルコト半年、適々東京大學ニ皮膚病學黴毒學講座新設ノ議アリ。先生ニ命ジテ斯科ヲ專攻セシム。先生乃チ27年1月ヲ以テ奧國維納大學ニ轉ジ、皮膚科學ノ泰斗カボシー教授ノ門ニ入り、併セテラング氏ノ許ニ黴毒學ヲ學ビ、尙ホノイマン氏、フイנגル氏等ニ學ベル外、尿道鏡實習ヲグリュンフェルド氏ニ、病理解剖ヲバルタウフ氏ニ就テ研究ス。次デ獨逸ブレスラウ大學ナイセル氏ノ教室ニ轉ジテ研究ニ從事ス。此間伊、英、露、瑞、獨、奧ノ諸大學ヲ歷遊シ、ベルタレリー、マヨツキイ、ヂユクレイ、カンパーナ、デ・アミチス、ピツク、ペーテルセン、ラツサール、マックス・ヨセフ、ポスチル、カスベル諸氏ヲ訪ヒ、ニッチェ氏ニ就テ膀胱鏡用法ヲ實習シ、更ニ轉ジテ巴里大學ニ於テギユイヨン氏ノ許ニ泌尿器外科ヲ修メ、兼チテベニエー、フルニエー諸氏ノ「クリニク」ヲ參觀ス。其他ウ・ルフ、ヤダッソン兩氏ト交リ、

同29年8月倫敦ニ於ケル第3回萬國皮膚病學會竝ニ30年10月帝國委員トシテ伯林ニ於ケル萬國癩病會議ニ參列、同31年1月歸朝ス。

此年2月東京帝國大學醫科大學助教授ニ任ジ、皮膚病黴毒學講座擔任ヲ命ゼラル。是レ實ニ我ガ帝國大學ニ於ケル本講座ノ濫觴ナリ。6月更ニ教授ニ陞任シ、次デ32年3月論文ヲ提出シテ醫學博士ノ學位ヲ受ケラレタリ。

明治35年4月、英國王エドワード七世陛下ノ戴冠式ニ差遣セラレタル彰仁親王殿下ニ隨行シ再ビ歐洲ニ渡リ、ナーポリ、ベルン、巴里、倫敦、維納、ブレスラウ、伯林、聖彼得堡等ノ諸大學及病院ニ舊師友ヲ歴訪シ、同年9月歸朝セラル。此行親シク各國ノ君主ニ謁見シ、伊太利國王陛下ヨリハ王冠四等勳章ヲ、白耳義國王陛下ヨリハ「レオポール 四等勳章」ヲ、西班牙國王陛下ヨリハ「イザベルラ・カトリック 二等勳章」ヲ、露西亞國王陛下ヨリハ神聖「スタニラス 二等勳章」ヲ、佛蘭西大統領ヨリハ「カンボヂュ 三等勳章」ヲ、英國ヨリハ皇帝皇后戴冠式記念章ヲ贈ラレタリ。

明治40年7月勅任教授トナリ、43年7月三度歐洲ニ遊ブ。ブラッセル市ニ開催セル萬國「ラヂウム學會」ニ參列シ、又ケーニヒスベルグ市ニ於ケル萬有學會ニ臨ミテハ六〇六號ノ討論ニ參加シ、其他伯林、維納、巴里等ノ皮膚科學會ニ出席シ、44年2月ドレスデン市ニ開設セル萬國衛生博覽會ニ委員トシテ出席セラル。又同地ニ於ケル獨逸花柳病豫防會ニ招待セラレタリ。其他主トシテ伯林、ベルン、巴里、伊太利、希臘及ビブレスラウニ於テ血清學、光線學等ニ就キ研究セラレ、巡遊1年ニシテ明治44年7月19日歸朝ス。

第4回ノ外遊ハ大正14年ニシテ露國學士院二百年祭舉行ニ際シ、賓客トシテ招待セラレタルニ因ル。8月17日東京ヲ發シシベリア經由、9月9日レニングラードニ於ケル式典ニ參列シタル後、莫斯科及ビ伯林ヲ經テ巴里ニ入り國際花柳病豫防協會ノ第2回總會ニ參加セラレタリ。10月9日同會ヲ終リテ直チニ西班牙國馬德利ヲ訪ヒ、國民圖書館ニ黴毒起源說ニ關シテ緊要ナル史料「デアス・デ・イスラ」ノ「マヌスクリプト」ヲ調査スル傍ラ西國古畫ヲ觀賞シ、之ニ醫學的考證ヲ試ミラル。翌15年1月米國ヲ經テ歸朝、本紀行ノ詳細ハ載セテ先生ノ絕筆「乙丑周游記」ニ在リ。

大正15年6月9日依願退職、特旨ヲ以テ正三位ニ進ム。同僚弟子ヲ始メ世人ハ切ニ其任ニ永カランコトヲ希ヒシモ及バズ、6月17日東講堂ニ於テ始メテ鐵門俱樂部主催ノ教授退職記念會開催セラレ、教授自ラモ亦6月24日外來診察所皮膚科講堂ニ於テ學生及戊戌會員ヲ前ニシテ最後ノ講義ヲ行ヒ、相俱ニ僅ニ惜別ノ情ヲ醫セ

リ。此際前後2回ノ記念講演「過去ヲ顧ミ將來ヲ思フテ」ハ眞ニ純理純情ヲ盡セルモノナリキ。先生ニ「辭官有感」ノ一詩アリ、以テ先生ノ衷情ヲ察スベシ。

泮官卅歲列清班。官後生涯豈等閒。多少人間猶有務。著書何必說藏山。

東西文化異淵源。混一車書帝業尊。賴有後人成我志。百年天地報君恩。

同年10月東京帝國大學名譽教授ヲ授ケラル。昭和2年6月9日門下生一同ハ先生ニ壽像ヲ上リ、其除幕式ヲ其邸ニ舉行ス。朝野ノ名士來リ會スル者甚多ク、新聞モ亦朋友門生友愛ノ情藹然タルヲ讚美セリ、昭和3年7月17日先生ガ其ノ私財ヲ投ジテ成レル日本性病豫防協會押上簡易診療院ノ診療ヲ開始シ自ラ院長タリ。然ルニ間モナク大患ニ罹ラセラル、鹽田外科ニ入院、9月25日ニ至リ根治手術ヲ受ケ、同11月9日退院セラレタリ。爾後一旦健康舊ニ復セシモ、昭和6年9月肝臟病ノ爲ニ再ビ病臥セラレ、遂ニ立タズ、11月6日眠ルガ如ク薨去セラル。享年六十有六歲。病篤キニ及ンデ朝廷ハ學術上竝ニ社會上多年ノ功績ヲ録サレ、特ニ昇敘シテ勳一等瑞寶章ヲ賜フ。謚シテ智德院殿松譽壽光鸚軒大居士ト謂フ。令夫人ハ多越子ト申サレ、京都府平民三井元之助氏令妹、法學士健男氏家ヲ嗣ギ、義弟章司氏ハ醫業ヲ繼承ス。

先生ノ名ハ夙ニ海外ノ斯界ニ重キヲ爲セリ、即チ伯林皮膚科學會、伊太利皮膚病黴毒學會、希臘雅典皮膚病學會、英國王立醫學會皮膚科部會、莫斯科皮膚花柳病協會、亞米利加皮膚科學會、ブカレスト皮膚病黴毒學會、佛國衛生道德豫防協會等ノ名譽會員タリ、維納皮膚科學會及ビ佛蘭西皮膚病黴毒學會ニ評議員タル外、大正15年(1926年)12月獨逸最古ノ學會ニシテ1677年普魯亞王レオボルト陛下ヨリ帝國學會トシテ公認セラレタル獨逸ハルレノ獨逸學士院會員ニ推舉セラレタリ。又翌昭和2年(1927年)2月28日獨逸ブレスラウ大學ヨリハヤダスソノ教授ノ提議ニ基キ、醫學特ニ皮膚科學及ビ黴毒史竝ニ日本醫學ト獨逸醫學トノ共同作業ノ爲ニ效サレタル大ナル功績ニ對シ名譽博士ヲ贈レリ。先生ハ又ピック、アウスピッツ兩氏ニ依リ創刊セラレテ世界ノ專門雜誌中最モ勢力アル獨逸皮膚病黴毒學寶函ヲ始メトシ、ラッサール氏ノ獨逸皮膚科雜誌、ウンナ氏ノ皮膚病週報竝ニ「ラヂウム」其他數種ノ雜誌ニ編輯委員トシテ名ヲ列セラル。顧フニ邦人ノ會々歐米各大學ヲ歴訪スルニ際シ、刺ヲ通シテ先生ノ門人タルコトヲ言ヘバ、即チ優待至ラザル所ナキ亦故アルナリ。

先生ノ醫學上ノ功績極メテ廣大ナリシト雖、就中顯著ナルハ本邦ニ於ケル皮膚科學ヲシテ外國ノ模倣ヨリ全然離脱セシメ得タルコトナリ。即チ

1. 先生ハ本邦ニ於テ文獻上ニ未ダ記載セラレザル諸種ノ皮膚病ヲ發見シテ、之

ヲ公表シタリ。(イ)土肥氏鱗狀毛嚢性角化症。(ロ)土肥及橋本氏結節狀結核性靜脈炎。(ハ)土肥及三宅氏進行性指掌角化症ノ如キ是ナリ。

2. 先生及ビ其門下ハ文獻ニ未記載ノ病原絲狀菌、即チ日本小芽胞菌ヲ發見セリ、本菌ハ本邦及ビ支那ニ於テ最モ廣ク蔓延セル傳染性皮膚病、謂ハユル、「しらくも」竝ニ「はたけ」ノ主要病原菌ナリ。

3. 本邦醫籍中ニ記載ヲ見ズ、其存否不明ナリシ多數皮膚病ノ存在ヲ確立シタリ：(イ)尋常性鱗屑癬、(ロ)狼瘡及ビ皮膚結核ノ諸症、(ハ)黃癬、紅色陰癬、白癬竝ニ其病原菌ノ確定、(ニ)足菌腫、(ホ)皮膚釀母菌病、(ヘ)「ピエドラ」竝ニ其病原菌確定、(ト)蛆隧症等ノ如キ是ナリ。就中注意スベキ研究ハ白癬菌病ノ研究ニシテ先生及ビ其門下ニヨツテ約30年ノ長期ニ亙リ本邦内地ヨリ臺灣、朝鮮、滿洲、南支ニ及ンデ汎ク遂行セラレ、多數ノ病原菌ヲ菌學的ニ分類シ、醫學及植物學上多大ノ裨益ヲ與ヘ、從來ノ學說ニ變改ヲ加ヘタリ。大正14年4月財團法人船員病及ビ熱帶病學獎勵會ハ其努力ヲ認メ先生及ビ其門下ニ授賞シタリ。

4. 病理學上ノ學說ニ變動ヲ與ヘタル研究少カラズ、(イ)傳染性膿痂疹ノ病原確定及ビ臨牀的分類、(ロ)黴毒患者ノ腦脊髓液中ニ「黴毒スピロヘーテ」發見、(ハ)癩病ノ病理ノ如キ是ナリ。

5. 東亞ニ於ケル皮膚科學ノ史的研究竝ニ皮膚病ノ分類、病名ノ選定、譯語ノ訂正。

6. 諸種ノ藥物學療法ニ於テ創意又ハ改良ヲナシ、依リテ以テ我學界ニ貢獻シタル所少カラズ、例ヘバ(イ)土肥氏爹兒膏ハ陸軍藥局方ニ收載セラレテ、(ロ)土肥氏石炭酸亞鉛花糊膏(ハ)土肥氏刺納林膏ト共ニ醫療上ニ頗ル廣ク使用セラレツ、アリ。其他下山教授ト謀リテ「チオノール」ヲ創製シ「無臭イヒチオール」トシテ外國製ノ同種藥品ヲ壓倒シ其輸入ヲ杜絶シタリ、又皮膚病ノ藥物的療法ニ確實ナル一定ノ方針ヲ確立シタリ。

7. 理學的療法ヲ我邦ニ於テ率先採用シ、治療界ニ一大革新ノ時期ヲ劃シタリ、(イ)「レントゲン療法」ハ既ニ明治三十七八年頃ヨリ皮膚病治療ニ之ヲ實施ス、(ロ)紫外線療法モ亦本邦ニ於テ醫學上實用ニ供セル先覺者ニシテ、明治14年ヨリ開始セリ。(ハ)「ラヂウム療法」ハ群疑ヲ排シテ之ヲ開始シ、該療法ニ關シテ本邦ニ於ケル第一人者ナリ、(ニ)其ノ考案ニナル土肥氏紫外線浴裝置ヲ完成シ、虛弱兒童ノ治療ニ實施セリ。又電氣高周波、電氣光線浴療法等ニモ亦先鞭ヲ付ケタリ。

8. 皮膚病蠟製標本ハ素ト先生ノ苦心シテ塙國ヨリ祕法ヲ探リシモノニシテ、本邦ニ於ケル氣候ノ關係竝ニ著色ノ耐久等ニ就キ先生ハ更ニ種々改良ヲ加ヘラレ、終ニ世界ニ誇ルベキ優秀品ヲ出スニ至レリ。故ヲ以テドレスデンニ於ケル萬國衛生博覽會ハ之ニ名譽賞狀ヲ贈レリ。模型ハ其數約2000ニ達シ、現ニ之ヲ先生在職25年記念トシテ東京帝國大學ニ寄附セラレタル土肥教授記念標本陳列館(大正14年4月3日開館)ニ收藏ス。

此他本邦學界ノ爲メニ致サレタル先生ノ功績中特說スベキモノハ日本皮膚科學會ノ創立ト皮膚科教室ニ於ケル皮膚科ト泌尿器科トノ併立ナリトス。日本皮膚科學會ガ明治33年12月發會式ヲ舉ゲテヨリ27年間先生ハ年々推サレテ會長トナリ、常ニ學海ノ思潮ヲ察シテ學理研究ノ針路ヲ誤ラシメザリキ。昭和2年4月同會ガ組織ヲ改メテ社團法人トナルニ及ンデ先生ハ更ニ名譽會頭ニ推薦セラル。該學會ノ機關雜誌タル皮膚科及泌尿器科雜誌ハ明治34年3月ノ創刊ニシテ、先生ハ終始其主筆ニ任ジ、始メテ外文ノ抄録ヲ添ヘ、以テ歐米各國ノ專門學會ト通信ノ途ヲ拓ケリ。其我邦ノ學術ヲ世界ニ紹介スルニ與リテ力アリタルハ敢ヘテ絮說ヲ須ヒズ。

皮膚科ト泌尿器科トノ併立ハ先生ノ在歐中ヨリ腹案セラレタル所ニシテ、率先シテ自ラ其專門的技術ヲ實習シ、歸朝ノ後直チニ教室ニ泌尿器科ヲ設ケ、又皮膚病黴毒學講義以外ニ毎年一學期間ハ必ズ泌尿器科學ヲ講義セラル。即チ當時ノ我大學ニ於テハ名ハ皮膚病學黴毒學講座タリシモ、實ハ皮膚病黴毒學兼泌尿器病學講座タリシナリ。是レ獨塙ノ大學ト較ミ學制ヲ異ニスル所ニシテ、西洋ニ於ケル皮膚科專門家ニ外科ノ素養アル者ノ寥々タルニ對シ、先生ガ外科出身タリシニ由ルトハ言ヘ、亦卓見ナラズトセズ。昭和2年皮膚科教室ニ皮膚科學(皮膚病黴毒學)ト泌尿器科學トノ二講座ヲ設置セラル、ニ至レルハ、先生多年ノ希望漸ク貫徹セラレタルモノニシテ、亦先生ノ功ナリ。而シテ先生ノ門ヨリ出デ泌尿器科專門ヲ以テ鬱然一家ヲ成セル者亦少カラズ。

先生ノ從來公事ニ致サレタル功績ヲ舉グレバ明治三十三四年ノ頃吉原病院長ニ任ジテ病院組織ノ改良ヲ圖リ、性病ノ治療ニ一大改革ヲ加ヘラレタルアリ。三十七八年戰役ニ當リテハ、陸軍衛生部ノ補助勤務トシテ東京衛戍病院ニ傷病者ノ救護ニ從ヒ、38年10月ヨリ中央衛生會委員ヲ仰付ラレ、40年1月以降停年退職ニ至ルマデ、海軍軍醫學校ノ皮膚病及黴毒學教授ヲ囑託セラル。先生又ブラッセルニ於ケル萬國性病豫防會ノ日本委員トシテ40年3月同志ト諮リ日本花柳病豫防會ヲ創立シ

タルガ、次デ大正9年10月17日之ヲ日本性病豫防協會ト改稱シ、同10年10月財團法人トナシ、年々醫師ノ爲ニ花柳病講習會ヲ開キ、或ハ公衆ニ對シテ講話ニ、演說ニ、活動寫眞ニ、展覽會ニ、「ラヂオ」ニ性病ノ害毒ヲ説クニ力メ、又大正10年12月1日機關雜誌「體性」ヲ創刊シテ之ガ主筆トナリ、性病豫防ニ關スル知識ノ普及ヨリ進ンデ、性的生物學、性的社會學ノ兩方面ヨリ廣ク男女ノ體性ヲ研究シテ、健全ナル國家ノ確立ト社會人類ノ繁榮トニ資スル所アラムコトヲ庶幾セリ。是等ノ目的ヲ達成センガ爲メニ大正13年11月性病無料診療所ヲ新常盤橋畔ニ設置シタルガ、是レ後日峻成セル押上簡易診療院ノ發端ナリ。其他、大學ノ國家醫學講習科、文部省ノ學校衛生講習會、內務省ノ花柳病講習會等ニ講師トシテ傳染性皮膚疾患竝ニ花柳病ニ關スル豫防及ビ治療ノ方法ヲ講ゼラル。又曾テ日本皮膚科學會ヲ代表シテ各地醫學專門學校ニ於ケル皮膚病黴毒學科ノ獨立ヲ文部省ニ建議シ、若クハ癩ノ豫防撲滅ヲ內務省ニ建議セルガ如キ、皆先生ノ發議立案ニ依ル所ニシテ、彼ノ花柳病豫防法案ノ發布ヲ見タルモ、實ニ先生ノ財團法人日本性病豫防協會會長トシテ其ノ必要ヲ建議セラレタルモノノ上司ニ認メラレタルニ依ルベシ(大正13年3月)。大正7年4月癌研究會ノ副會頭ニ舉ゲラレタル他、昭和5年1月日本「ミコロジー協會」ヲ創立シ之ガ會長タリ。

先生ノ著作モ亦鮮カナラズ、孰レモ敘事明確、文章洗練ナル外、獨創的識見ニ富メリ。大學々生生活中ニ(1)外科汎論ヲ著シ、皮膚科教室ノ基礎漸ク成ルニ及ンデ(2)日本皮膚黴毒圖譜10帙(明治36年)、次イデ(3)皮膚科學上卷(明治43年)及ビ下卷(大正3年)ヲ著ハサレタリ。就中皮膚科學ハ先生業績ノ縮圖トモ稱スベキ大著ニシテ斯道ノ典範タルベキモノナルガ、其著述ニ際シ「總テノ問題ニ對シテ確實ナル「クリチック」ヲ下シ得ズ、幾タビカ筆ヲ擲ツノ外ナカツタ」ト告白セラレ。第11版ニ於テハヒルトルノ言ヲ引用シテ「本書ガ果シテ當代皮膚病理學ノ記念館タルヤ否ヤハ一ニ後人ノ批判ニ委チン而已」ト漏ラサレタリ。以テ本書著作ノ勞苦大ニシテ自信ノ厚カリシコトヲ窺フベシ、(4)彩色皮膚病圖譜上卷(大正9年)及ビ中卷(遠山共著、昭和5年)、竝ニ(5)皮膚科ヨリ見タル理學的療法ノ外、(6)世界黴毒史(邦文及ビ獨文)ノ名著アリ。本書ハ東洋ニ於ケル黴毒ノ傳播徑路ニ立脚セル新研究ニシテ多年ノ疑問タリシ黴毒起源論ノ解決ニ與ツテカアリ。先生第4回渡歐ノ日親シク西國ニ古文籍ヲ涉獵シテ所信ヲ確クシ、更ニ大金ヲ投ジテヂアス・デ・イスラノ著書第1版ヲ購ハレタル如キ、實ニ學ニ忠ナルモノアリキ。而シテ本著ニ對シ昭和2年5

月 20 日帝國學士院ヨリ東日賞ヲ授與セラレタルコトハ世人ノ熟知スル所ナリ。

先生、字ハ民卿、鶚軒ト號シ文學、詩文、美術史、繪畫、彫刻等ノ趣味ニ富ミ、就中漢文學ノ嗜ミ最モ深ク我國古來ノ詩文集ヲ蒐集スルコト數萬卷ニ及ブ。先生科學研鑽ノ餘暇、珍書名畫ノ間ニ起臥シテ讀書ニ耽リ筆硯ニ親ミ悠々自適セラル。前キニ「鶚軒游戲」、後ニ「乙丑周游記」ノ好著アリ。就中「乙丑周游記」ハ病臥中ニ成リ、病篤キニ及ンデ筆硯ヲ捨テ給ハズ。處女作「外科汎論」ニ倣ヒ吳、井上竝ニ藤浪(鑑)三博士ヲ病牀ニ招ヒテ序及ビ跋文ヲ依囑シ首尾爰ニ完キヲ得タリ。

先生人トナリ重厚寡言、友誼ニ厚ク、好ンデ後進ヲ指導誘掖セラレ、居常端嚴容易ニ人ニ許サレザルモ、一タビ就ケバ溫乎春風ニ浴スルガ如シ。從ツテ先生ノ門下ヨリ出デテ大學及ビ專門學校ノ教授、助教授、講師タル者、陸海軍軍醫ノ首腦部ニ在ル者或ハ民間ニ於テ有力ナル地歩ヲ占ムル者屈指スルニ違アラズ。皆誓ツテ先生ノ驥尾ニ附シ、道ノ爲ニ力行ヲ期セリ。

先生病臥ノ日曰ク「終始一貫科學ノ爲ニ精進シ來リ科學ニヨツテ人生觀ヲ體得シ得タリ」ト。又臨終ニ近キ夕曰ク「自然ノ懷ニ生レテ自然ノ懷ニ歸ル、今ヤ一點ノ心ニ懸ル雲モナシ」ト。理已分古今、道自在咫尺。眞ニ先生ニ於テ科學ノ極致ハ宗教ノ眞髓ニ能ク合致スルヲ見ル。然ルニ一代ノ碩學、千古ノ偉人今ヤ亡シ。嗚呼悲哉。

編輯委員 門人 遠山郁三
高橋明

先生ノ業績一覽 (抄)

- 1) Über Prurigo. (Berl. klin. Wochenschr. 1898. Nr. 22.)
- 2) 日本ノ癩病ニ就テ。(九州醫學會演說. 1901 年 2 月.)
- 3) 黴毒新論。(朝香屋書店. 1903 年.)
- 4) Zur Histologie der Lepra, insbesondere über Leprazellen, Globi u. Riesenzellen. (Lep-rakonferenz.)
- 5) 皮脂腺腫、一名對立性顔面母斑ノ 1 例。(皮膚科泌尿器科雜誌. 第 3 卷. 3 號, 4 號. 1903 年 7 月.)
- 6) 東京帝國大學醫科大學皮膚科新來患者統計(明治 32—35 年). (栗田章司共著)(皮. 泌. 第 3 卷. 6 號.)
- 7) 淋病ト家庭。(皮. 泌. 第 4 卷. 1 號.)
- 8) 軍隊ト花柳病。(婦人衛生雜誌. 177 號. 1904 年 8 月.)
- 9) 「黴毒スピロヘーテ. バルリダ」ノ研究報告, 第 1. (田中友治共著)(皮. 泌. 第 5 卷. 5 號, 6 號.)

- 10) 印度醫學ト水銀, 附水銀ヲ驅黴藥トシテ用ヒシ濫觴. (皮. 泌. 第5卷. 1號.)
- 11) 膿疱疹論. (栗田章司共著)(皮. 泌. 第4卷. 3號, 4號.)
- 12) 東京帝國大學皮膚科新來患者統計. (皮. 泌. 第7卷. 2號.)
- 13) 一種ノ皮膚潰瘍ノ臨牀的及細菌的報告, 附插圖. (中野等共著)(皮. 泌. 第8卷. 6號.)
- 14) 東京帝國大學皮膚科教室新來患者統計. (皮. 泌. 第10卷. 7號, 8號, 9號.)
- 15) 新藥「ヂオキシ. ギアミド. アルゼノ. ベンツオール」ノ黴毒ニ對スル效力. (田中友治共著)(皮. 泌. 第13卷. 8號.)
- 16) ワツセルマン, ナイセル及ブルツク 3 氏ノ血清診斷法ノ實驗, 附所謂對抗素トシテノ「クオリン」ノ新應用ニ就テ. (伊藤徹太共著)(皮. 泌. 第9卷. 1號.)
- 17) 黴毒ノ原因, 診斷及療法ニ關スル輓近ノ進歩. (皮. 泌. 第10卷. 1號.)
- 18) 黴毒菌論. (産科婦人科雜誌. 第2號. 第4冊.)
- 19) 麻醉法. (東京醫學會雜誌. 第7卷. 11號.)
- 20) 黴毒ト「スピロヘーテ. パルリダ」トノ原因的關係ヲ再論ス, 附患者及標本ノ説明. (東京醫學會雜誌. 第20卷. 1號.)
- 21) 癩病ノ病理組織ニ關スル追加説. (東京醫學會雜誌.)
- 22) Unsere Erfahrungen über die Salvarsanbehandlung im Lauf eines Jahres. (田中友治共著)(Dtsch. med. Wochenschr. 1911. Nr. 48.)
- 23) 既往1年間ニ於ケル「サルワルサン」ノ治驗. (田中友治共著)(皮. 泌. 第12卷. 1號.)
- 24) 惡性腫瘍ニ對スル「ラヂウム療法」ノ追加, 其1. (峯正意共著)(皮. 泌. 第12卷. 7號.)
- 25) 惡性腫瘍ニ對スル「ラヂウム療法」ノ追加, 其2. (峯正意共著)(皮. 泌. 第12卷. 8號.)
- 26) 先天性手掌及足蹠角化症ノ1例, 附「ラジウム」及「レントゲン線」ノ角化症ニ及ボス治療的效價. (峯正意共著)(皮. 泌. 第13卷. 3號.)
- 27) 水銀石英燈ノ皮膚科ニ於ケル應用. (峯正意共著)(皮. 泌. 第12卷. 3號.)
- 28) 皮膚科ニ於ケル理學的療法特ニ「ラジウム療法」ニ就テ. (日新醫學. 明治44年11月20日發行. 第1年. 3號.)
- 29) 國民體育ノ改良, 附婦人ノ責任. (婦人衛生雜誌. 271號. 1912年.)
- 30) Zur Klinik u. Ätiologie der Impetigo contagiosa. (Sh. Dohi 共著)(Arch. f. Derm. u. Syph. Bd. CXI. Ht. 2. 1912.)
- 31) 皮膚結核ノ診斷及治療法. (日新醫學. 大正2年2月27日發行. 第2年. 6號.)
- 32) Sind die Spirochaeten den Protozoen oder den Bakterien verwandt? (S. Hidaka 共著)(Arch. f. Derm. u. Syph. Bd. CXIV. Ht. 2.)
- 33) 「ラジウム輻射線」ニ因ル健態及病的組織ノ變化. (牧五郎共著)(皮. 泌. 第13卷. 3號.)
- 34) 黴毒學ノ輓近ニ於ケル進歩.
- 35) 莖外線療法.
- 36) 「ラヂウム療法」.
- 37) 明治年間ニ於ケル我皮膚科學小史. (皮. 泌. 第13卷. 4號.)
- 38) 「ラヂウム輻射線」ニ因ル健態及病理的組織ノ變化. (牧五郎共著)(皮. 泌. 第13卷. 4號.)
- 39) 日本皮膚科史料. (東京醫會創立25年祝賀論文. 第4輯. 1913年.)
- 40) 「ラヂウム」ノ外科ニ於ケル適用ヲ再論シテ世ノ誤解ヲ正ス. (醫學中央雜誌. 160號. 1913)

年6月.)

- 41) 本邦ニ發見セル足菌腫病ノ臨牀的細菌學的知見補遺. (小池正晁共著) (皮. 泌. 第13卷. 7號.)
- 42) 「スピロヘーテン培養」ヲ心臟ニ注射シテ發生セル家兎ノ全身黴毒. (佐谷有吉共著) (皮. 泌. 第13卷. 9號.)
- 43) 「ラヂウム療法」.
- 44) 癩ニ就テ. (皮. 泌. 第16卷. 1號, 2號, 3號.)
- 45) 東京帝國大學醫科大學皮膚科教室沿革略, 附教室平面圖. (土肥教授大學卒業25年祝賀論文集. 戊戌會.)
- 46) Keizo Dohi, Professor u. Direktor der Kaiserlichen Universitätsklinik u. Poliklinik für Dermatologie u. Urologie zu Tokyo. Zu seinem 25jährigen Doktorjubiläum in Verehrung von seinen Schülern u. Freunden.
- 47) 土肥教授大學卒業25年記念論文集. (戊戌會. 1917.)
- 48) 學者ノ覺悟. (皮. 泌. 第18卷. 3號.)
- 49) 南米地方病「エスプンヂア」(「亞米利加レイシユマニア症」)ニ就テ. (加藤泰共著) (皮. 泌. 第19卷. 1號.)
- 50) 周禮ニ見エタル支那古代ノ醫制. (皮. 泌. 第19卷. 3號.)
- 51) 世界黴毒史考. 上. (皮. 泌. 第19卷. 4號, 5號.)
- 52) 世界黴毒史考. 中. (皮. 泌. 第19卷. 6號.)
- 53) 世界黴毒史考. 下ノ1. (皮. 泌. 第19卷. 7號.)
- 54) 世界黴毒史考. 下ノ2. (皮. 泌. 第19卷. 8號, 9號.)
- 55) 世界黴毒史考. 續1. (皮. 泌. 第20卷. 3號.)
- 56) 世界黴毒史考. 續2. (皮. 泌. 第20卷. 4號.)
- 57) 世界黴毒史考. 續3. (皮. 泌. 第20卷. 5號.)
- 58) 世界黴毒史考. 續4. (皮. 泌. 第20卷. 7號, 8號.)
- 59) 世界黴毒史考. 續5. (皮. 泌. 第20卷. 9號.)
- 60) 世界黴毒史考. 續7, 8. (皮. 泌. 第20卷. 10號, 11號.)
- 61) 輕粉ニ就テ. (皮. 泌. 第20卷. 4號.)
- 62) 皮膚科學會20年間ノ回顧. (皮. 泌. 第20卷. 5號.)
- 63) 黴毒性紅斑, 丘疹及膿疱ノ1例, 其二重感染ニ就テ. (皮. 泌. 第21卷. 10號.)
- 64) 血族結婚間ニ生レシ兄妹ニ發生セル先天性表皮水疱症. (皮. 泌. 第21卷. 3號.)
- 65) 廣汎ナル皮膚疣狀結核ノ1例. (皮. 泌. 第21卷. 4號.)
- 66) 晚發遺傳黴毒ノ1例. (皮. 泌. 第22卷. 1號.)
- 67) ホーム氏葉ヲ有スル攝護腺肥大症ノ1例. (皮. 泌. 第22卷. 2號.)
- 68) 口脣頬粘膜ノ粟狀結核性潰瘍. (皮. 泌. 第22卷. 6號.)
- 69) 綠膿菌ニヨル大人ノ壞疽性惡液性深膿疱症. (皮. 泌. 第24卷. 1號.)
- 70) 黴毒起源ノ研究ノ徑路. (東洋學藝雜誌. 第43卷. 531號. 昭和2年7月.)
- 71) 土肥教授25年在職祝賀會記事. (皮. 泌. 第24卷. 6號.)
- 72) Über den Ursprung der Syphilis. (皮. 泌. 第24卷. 6號.)
- 73) 極東ニ於ケル遺傳黴毒ト其療法ノ史眼. (原佛文)(花柳病豫防國際會議. 巴里. 1925年10月.)
- 74) 黴毒ノ起原問題ニ就テ(古代黴毒ノ妄ヲ論ズ). (社會醫學雜誌. 461號.)

- 75) 新皮膚病藥「グリテール」ト濕疹。(實驗醫報. 第10年. 115號.)
- 76) 正倉院藥種ノ史的考察。(原獨文)(社會醫學雜誌. 473號. 1925年11月.)
- 77) Coup d'œil historique sur l'hérédosyphilis et son traitement en Extrême-Orient.
(Bruxelles Medical. 1925年10月. No. 2.)
- 78) Medicine in Ancient Japan. Study of Some Drugs Preserved in the Imperial Treasure House at Nara.
- 79) 「ラヂウム療法」ノ歐米ニ於ケル最近ノ趨勢。(皮. 泌. 第26卷. 3號.)
- 80) Zur Frühgeschichte der Syphilis (Dtsch. med. Wochenschr. Nr. 15—17. 1926.)
- 81) 黴毒初史追説(教授辭任ノ記念講演ニ代ヘテ)。(醫海時報. 1661號, 1662號, 1663號.)
- 82) 黴毒療法ノ過去及現在。(第8回日本醫學會總會特別講演)(皮. 泌. 第26卷. 5號, 6號.)
- 83) 過去ヲ顧ミ將來ヲ思フテ。(土肥教授退職記念講演)
- 84) 畫伯ムリイヨ筆聖女エリサベス畫中ノ病者ノ診斷。(體性. 第7卷. 3號.)
- 85) 黴毒初史ノ追説。(體性. 第7卷. 4號.)
- 86) 若狹ミヤゲ。(體性. 第7卷. 4號.)
- 87) 黴毒起源ニ關スルイスパニア故書ノ探索旅行。(體性. 第10卷. 3號.)
- 88) Gedenkrede für Albert Neisser bei der 25 Jahresfeier der Japanischen Gesellschaft zur Bekämpfung der Geschlechtskrankheiten am 29. Oktober 1927.
- 89) 故野口博士ノ皮膚病黴毒學上功績。(日本工業俱樂部ニ於ケル講演)(體性. 1928年8月.)
- 90) 醫人トシテ觀タ故後藤伯。(追悼會開會辭)(體性. 1929年. 7月.)
- 91) 光線療法ノ發達。(紫外線. 第1卷. 1號. 1929年.)
- 92) 皮膚科ニ於ケル放射線療法ノ回顧。(東京醫事新誌. 2619號, 2620號.)
- 93) 「ソラックス燈」ト「セジオチック燈」及ビ余ノ創案ニ成レル太陽燈浴室。(紫外線. 第1卷. 3號.)
- 94) Die Drogen in der Kaiserlichen Schatzkammer Schōsō-In zu Nara. (Japanisch-Deutsche Zeitschr. Neue Folge. I. Jg. Ht. 10 u. 11. 1929.)
- 95) 學童ノ皮膚殊ニ濕疹ニ就テ。(講演. 1929.)
- 96) 放射線療法ノ30年。(日本「レントゲン學會」雜誌. 第7卷. 2號.)
- 97) 光線X線及ビR線療法ニ就テノ懷舊談。(東西醫學大觀. 28號.)
- 98) 老人性瘙癢症ノ原因ト余ノ所謂尿毒性濕疹, 附林鳳岡ノ症狀。(實驗醫報. 第16年. 183號.)
- 99) 「ラヂウム療法」ノ概要。(東京顯微鏡學會雜誌. 第37卷. 4號.)
- 100) Albert Neisser.
- 101) 醫學博士子爵橋本綱常先生ノ傳。(皮. 泌. 第9卷. 3號.)
- 102) 武生文學談話。(武生鄉友會誌. 1918.)
- 103) 石渡宗伯。(武生鄉友會誌. 1918.)
- 104) 我幼時ノ記憶ニ殘ル武生騷動。(武生鄉友會誌. 1919.)
- 105) 創立時代ノ進修小學.
- 106) 森余山先生ニ就テ.
- 107) 栗塚先生ト齋藤先生.
- 108) 西葡紀行.
- 109) 宇野先生ノ追憶。(皮. 泌. 第29卷. 1號.)
- 110) 皮膚科ヨリ觀タ故弘田博士。(兒科雜誌. 348號.)
- 111) 笠原伯翁ヲ中心トセル本邦種痘所ノ創始。(若越醫談. 昭和5年. 22號.)

Keizo Dohi †.

Keizo Dohi, Senior des III. Hofranges und Ehrenprofessor der Kaiserl. Universität in Tokyo, litt seit Juni dieses Jahres an einer Leberkrankheit und ist am 6. November 6.05 Uhr im Alter von 65 Jahren gestorben. Er wurde am 20. Juli 1866 als zweiter Sohn von Sohaku Ishiwata, eines Leibarztes des Daimyo von Fuchū in Echizen geboren. In seiner Familie war der ärztliche Beruf erblich.

Dreizehnjährig verließ er die Volksschule seiner Heimat und ging mit seinem Bruder nach Tokyo, wo er bis 1885 Mittelschulbildung erhielt. Vom Winter 1885 bis Winter 1889 studierte er an der medizinischen Fakultät der Kaiserl. Universität zu Tokyo, arbeitete aber währenddessen schon an seiner ersten bedeutenden Schrift „Geka-Hanron“ (Allgemeine Chirurgie). 1890 wurde er Volontärassistent des Professors Scriba an der Chirurgischen Klinik und trat zwei Jahre später in die medizinische Daigakuin und ins Laboratorium ein, wo er sich unter Leitung der Professoren Miura, Uno, Murata und Sato mit der Chirurgie im allgemeinen und Aussatzforschung beschäftigte. 1893 machte er seine erste Studienreise nach Europa und bezog zuerst die Universität in Heidelberg, studierte in der Klinik Czernys, besuchte nebenbei die laryngologische Poliklinik von Jurasz, nahm Kurse über normale Histologie bei Ewald, über pathologische Histologie bei Arnold, über Bakteriologie bei Ernst etc. Unterdessen wurde die Begründung eines Lehrstuhles für Dermatologie und Syphilidologie in Tokyo angeregt, und er erhielt den Auftrag, sich diesen Spezialfächern zu widmen. 1894 ging er dann nach Wien und studierte während zweier Jahre an der dortigen Universität als Aspirant unter Leitung des berühmten Professors der Dermatologie, Dr. Kaposi, und bei Professor Lang Syphilidologie. Außerdem besuchte er die Klinik Neumanns und die Poliklinik Fingers und ebenfalls das pathologisch-anatomische Institut von Prof. Paltauf. Im Januar 1896 ging er nach Italien, die Pellagra zu studieren, kehrte jedoch nach drei Monaten nach Wien zurück und besuchte im Juni Prag. Im August desselben Jahres nahm er am III. Internationalen Dermatologen Kongress in London teil und besuchte nach seiner Rückkehr Russlands Lepragegenden, bei welcher Gelegenheit er einige der Russischen Professoren kennen lernte. Im November kehrte er wieder nach Berlin zurück und widmete sich unter Prof. Nitze der speziellen Forschung der Cystoskopie. Von Berlin reiste er über Riga und Königs-

berg nach Breslau, wo er mit Prof. Neisser Freundschaft anknüpfte. Von hier fuhr er 1897 nach Paris und betrieb bei Prof. Guyon eifrige Forschungen in der chirurgisch-urologischen Klinik. So zeitigte schon die Begründung des Lehrstuhles für Dermatologie, Syphilidologie und Urologie in der Kaiserl. Universität zu Tokyo die ersten Früchte. Später reiste er über Strassburg nach Bern in der Schweiz, wo er unter Prof. Jadassohn während einiger Monate seine Spezialforschungen fortsetzte. Da am 11. Oktober in Berlin die Internationale Leprakonferenz eröffnet wurde, nahm er als Vertreter der Japanischen Regierung daran teil und veröffentlichte hier auch seine Abhandlungen über die Histologie der Lepra, die er bei Prof. Jadassohn fertiggestellt hatte. Nach Schluß dieser Konferenz kehrte er nach Paris zurück, verliess am 21. November Antwerpen auf dem Wege nach seiner Heimat und erreichte Tokyo im Januar 1898, reich an Erfahrungen und Kenntnissen und vollendete somit seine fünfjährige und erste Studienreise. Im Februar wurde er zum Außerordentlichen Professor an der medizinischen Fakultät der Kaiserl. Universität in Tokyo ernannt und vier Monate später zum Ordentlichen Professor. 1899 erhielt er infolge seiner bisherigen Arbeiten den "Hakushi-Titel". Im April 1902 wurde er als Begleiter des Prinzen Komatsu nach England entsandt, um der Krönungsfeier des Königs Edward VII. von England beizuwohnen. Unterwegs besuchte er seine früheren Kollegen, Universitäten, Krankenhäuser in Neapel, Bern, Paris, Wien, Breslau, Berlin und St. Petersburg, und kehrte im September nach Japan zurück. Bei dieser ehrenvollen Reise wurde er von Monarchen verschiedener Länder in Audienz empfangen, beantwortete ihre Fragen und wurde mit Orden verschiedener Staaten ausgezeichnet. Im Juli 1910 unternahm er seine dritte Reise nach Europa. Unterdessen hatten Theorie und therapeutische Praxis der Dermatologie und Venerologie grosse Umwälzungen erfahren; das Radium war entdeckt, die praktische Ausgestaltung der Verwendbarkeit der Ultraviolettstrahlen angebahnt worden, ferner war die Affensyphilis bestätigt, die *Spirochaeta pallida* entdeckt, und die Wassermannsche Reaktion ihr gefolgt und endlich das Präparat 606 in die Welt hinausgegangen. Am 13. September war er in der Internationalen Naturforscher-Versammlung, wo er sich an den Diskussionen über das Präparat 606 beteiligte. Außerdem besuchte er andere Dermatologen-Kongresse in Berlin, Wien, Paris etc. und fungierte im Februar 1911 auch als Delegierter der Japanischen Regierung bei der Internationalen Ausstellung für Gesundheitswesen in Dresden und nach ihrem Abschluß wurde ihm

ein Ehren-Diplom für die in seiner Klinik hergestellten Moulagen überreicht. Später wurde er zur Tagung der Deutschen Gesellschaft für Geschlechtskrankheiten eingeladen. Die übrige Zeit widmete er sich besonders der Erforschung der Serologie und Strahlentherapie in Berlin, Paris und Brüssel, und am 19. Juli traf er wieder in Tokyo ein. Während dieser Reise nach Europa wurde er Ehrenmitglied von verschiedenen Fachinstituten in Berlin, Paris, Wien, Italien und Griechenland und Mitarbeiter der Fachzeitschriften für Dermatologie und Urologie in Deutschland und Frankreich. Außerdem war er Mitglied der Internationalen Gesellschaft für Syphilisprophylaxie, wurde dann Direktor der Japanischen Dermatologen Gesellschaft und Chefredakteur für die Prophylaxie der Geschlechtskrankheiten. Im Juni 1916 beging er die Feier seines 25jährigen Doktorjubiläums; dankbare Schüler und Freunde in großer Zahl bemühten sich bei dieser Gelegenheit, eine Sammlung seiner bisherigen Arbeiten der wissenschaftlichen Welt vorzulegen. Ein Jahr später kamen diese in Japanischer und einigen Europäischen Sprachen heraus. Im April wurde er Vicedirector der Gesellschaft für Krebsforschung. Im April 1919 wurden die Kaiserl. Universitäten in Japan von der Regierung reformiert und er wurde zum Professor einer derselben angestellt und erhielt den Lehrstuhl für Dermatologie und Syphilidologie. Nachher betätigte er sich immer noch, nicht nur an der Universität, sondern auch mit andern wissenschaftlichen Arbeiten, bis er 1926 seine geliebte Universität verlassen musste, da er die Altersgrenze (60 Jahre) erreicht hatte. Er arbeitete aber weiter bis zu seinem Tode an der Prophylaxie der Geschlechtskrankheiten. Außerdem studierte er in letzter Zeit eifrig die Literatur der Syphilis. „Die Geschichte der Syphilis“ ist die grösste Frucht seiner damaligen Forschung, in der die Verbreitung der Syphilis im Orient und deren Ursprung klar gelegt wurden. Durch dieses Werk wurde sein Name in der wissenschaftlichen Welt sehr berühmt. Auch die Kaiserl. Akademie der Wissenschaften zeichnete ihn aus.

Er war ebenfalls ein Meister in der Chinesischen Dichtung und unter dem Schriftstellernamen „Gakuken“ dichtete er eifrig bis an sein Lebensende. Seine berühmtesten literarischen Werke sind „Gakuken Yūgi“ und „Itsuchū-Shūyūki“ (Weltreise im Jahre 1925). Nach seinem Tode verlieh ihm posthum. die Japanische Regierung den Verdienstorden I. Kl.

Titel, Orden und Ehrenzeichen.

- 1) Emerit. Professor der Universität zu Tokyo;
- 2) Mitglied des Zentralsanitätsausschusses des Kaiserl. Japanischen Ministeriums des Innern;
- 3) Doctor med. h. c. der Universität zu Breslau;
- 4) Mitglied der Kaiserl. Deutschen Akademie der Naturforscher zu Halle;
- 5) Ehrenmitglied der Berliner Dermatologischen Gesellschaft;
- 6) Socio Onorario della Società Italiana di Dermatologia e Sifilografia;
- 7) Korrespondierendes Mitglied der Wiener Dermatologischen Gesellschaft;
- 8) Membre Correspondant de la Société Française de Dermatologie et de Syphiligraphie;
- 9) Membre Honoraire de la Société de la Dermatologie Athénienne;
- 10) Corresponding Member of the Dermatological Section of the British Royal Society of Medicine;
- 11) Membre Titulaire de la Société de Dermatologie et de Vénérologie de Moscou;
- 12) Corresponding Member of the American Dermatological Association;
- 13) Ehrenmitglied der Dermato-Venerologischen Gesellschaft zu Odessa;
- 14) Membre d'Honneur de la Société Française de Prophylaxie Sanitaire et Morale;
- 15) 1902: Kronenorden IV. Kl. (Italien);
- 16) 1902: Ritter des Leopold-Ordens. (Belgien);
- 17) 1902: Ritter des Grossen Isabella-Ordens (Spanien);
- 18) 1902: Stanislaus-Orden II. Kl. (Russland);
- 19) 1902: Ritter des Schwarzen Stern-Ordens (Frankreich);
- 20) 1902: Krönungs-Medaille (England);
- 21) November 1931: Orden des Heiligen Schatzes I. Kl. (Japan).

Keizo Dohi †.

Non seulement la dermatologie japonaise mais aussi le monde médical du Japon déplorent la perte de l'éminent maître et fondateur de la dermatologie japonaise, le Docteur Keizo Dohi, professeur honoraire à la faculté de médecine de l'Université Impériale de Tokio, Chevalier du III^e degré de la cour, honoré de l'ordre pour le mérite I^e classe. Il souffrait depuis juin a. c. d'une maladie de foie et succomba le 6 novembre à 6,05 heures à l'âge de 65 ans. Ce ne sont pas seulement ses parents et amis, ses collègues et élèves qui perdent le conseiller le plus averti et l'ami le plus sincère qui se sont réunis à ses funérailles, mais aussi des milliers qui admiraient et aimaient son mérite humanitaire et ses vertus. C'était aussi la cour Impériale qui voulut récompenser ses remarquables travaux scientifiques et philanthropiques par le don de l'ordre du Zuiho de première classe.

Keizo Dohi naquit le 20 juillet 1866. Il était fils de Sohaku Ishiwata, médecin de la Cour du daimyo de Fuchū (Takefu) dans la province d'Echizen. Dans sa famille, la profession médicale était héréditaire.

A l'âge de 13 ans, il quitta l'école élémentaire de son pays natal pour aller avec son frère à Tokyo, où il entra au lycée qu'il fréquenta jusqu'à 1885. De l'hiver de 1885 à celui de 1889 il étudia à la Faculté de médecine de l'Université Impériale de Tokio et publia déjà pendant ses années d'études une œuvre "Geka-Hanron" (Traité élémentaire de Chirurgie) fort importante à cette époque. En 1890, il devint assistant volontaire du professeur Scriba à la clinique chirurgicale; après deux ans il entra au Daigakuin (Cours complémentaire), où il s'occupa sous la direction des professeurs Miura, Uno, Murata et Sato de pathologie et d'anatomie pathologique et spécialement de recherches sur la lèpre.

En 1893, il fit son premier voyage d'études en Europe pour se consacrer à l'étude de la médecine à l'Université de Heidelberg dans la clinique du professeur Czerny; en même temps il étudia la laryngologie chez Juraz, l'histologie normale chez Ewald, l'histologie pathologique chez Arnold et la bactériologie chez Ernst. Comme le gouvernement avait alors l'intention de fonder une chaire de dermatologie et de syphiligraphie à Tokio, il fut chargé de se préparer à cette position en se spécialisant dans ces deux branches. A cette fin, il alla à Vienne et y travailla pendant 2 ans comme assistant des professeurs Kaposi et Lang,

spécialistes en dermatologie et en syphiligraphie. En outre, il étudia aux cliniques des professeurs Neumann et Finger et aussi à l'Institut anatomo-pathologique du professeur Paltauf. En janvier 1896, il fit un voyage d'études en Italie pour y faire des recherches sur la pellagre, mais, après 3 mois, il rentra à Vienne qu'il quitta en juin pour se rendre à Prague.

En août de la même année, il devint membre du 3^e Congrès international de dermatologie tenu à Londres et, à son retour, il visita les provinces de Russie où se trouvent encore des endémies de lèpre et des léproseries. A cette occasion il fit connaissance de plusieurs professeurs russes.

En novembre, il revint à Berlin s'initier chez Nitze à la cystoscopie. De Berlin il alla à Breslau en passant par Riga et Koenigsberg, où il se lia d'amitié avec Neisser et étudia sous sa direction la bactériologie de la gonorrhée. De là il se rendit en 1897 à Paris, où il fréquenta assidûment la clinique urologique de Guyon. C'est ainsi que la création de la chaire professionnelle de dermatologie, syphiligraphie et urologie de l'Université de Tokyo récolta les premiers fruits. En juin, il alla à Berne en Suisse, en passant par Strasbourg, et continua pendant quelques mois ses recherches spéciales sur l'histologie de la lèpre chez le professeur Jadassohn. Le 11 octobre eut lieu à Berlin l'inauguration du Congrès international de recherches sur la lèpre et il y prit part en qualité de délégué du gouvernement japonais et y publia aussi ses "Traités sur l'histologie de la lèpre" qu'il avait écrits chez le professeur Jadassohn. Après la Conférence, Dohi repassa par Paris, puis continua à Anvers, d'où il s'embarqua pour le Japon.

En janvier 1898, après avoir accompli ce premier voyage d'études qui avait duré 5 longues années, Dohi était de retour à Tokio, très riche d'expériences et de savoir. En février, il était nommé professeur adjoint de dermatologie et de syphiligraphie à la Faculté de médecine de l'Université de Tokio et en juin, professeur ordinaire. En 1899, il reçut en reconnaissance de ses qualités et de ses travaux scientifiques le titre de Hakushi.

Il revint de nouveau en Europe en 1902, accompagnant le prince Komatsu au couronnement du roi Edouard VII d'Angleterre. En route il visita ses anciens collègues, des universités, des hôpitaux à Naples, Berne, Paris, Vienne, Breslau, Berlin et St. Pétersbourg et revint au Japon en septembre. Pendant ce voyage honorifique, il fut reçu en audience par les monarques de différents pays, répondit à toutes leurs

questions et reçut des décorations de plusieurs États. En août 1910, il fit, à son compte cette fois, son troisième voyage en Europe.

A cette époque la théorie et la pratique dermatologique et syphili-graphiques avaient fait de grands progrès; le radium venait d'être découvert et la phase pratique de l'utilisation des rayons ultra-violets avait commencé. En outre l'inoculation de la syphilis au singe était réalisée, la *spirochaeta pallida* et la réaction de Bordet-Wassermann étaient découvertes, et aussi le fameux médicament "606" commençait sa course triomphale autour du monde.

En septembre il se rendit à Koenigsberg au Congrès des naturalistes, prit part à la discussion sur le surdit "606". Il se rendit également à d'autres Congrès de dermatologie à Berlin, Vienne et Paris et, en février 1911, il prit part en qualité de délégué du Japon au Congrès international d'hygiène et reçut le diplôme d'honneur pour les moulages faits à sa clinique. Plus tard il fut invité à prendre part aux séances de la Société allemande pour les recherches des maladies vénériennes. Le reste de son temps il le consacra surtout aux études de sérologie et de thérapie des rayons X à Berlin, Paris et Bruxelles et rentra à Tokio le 19 juillet.

Pendant ce voyage en Europe il devint membre honoraire de différents Instituts scientifiques de Berlin, Vienne, Paris, Italie et de Grèce ainsi que collaborateur des périodiques de dermatologie, syphiligraphie et urologie en Allemagne et en France; il était aussi membre du Comité de la Société internationale de la prophylaxie de la syphilis et représentant de la Société japonaise de dermatologie et rédacteur en chef de la prophylaxie des maladies vénériennes. En juin 1916, il célébra son 25ième anniversaire de doctorat; à cette occasion ses élèves et ses amis recueillirent en une seule collection tous ses travaux pour les présenter au public savant. L'année suivante, on les publiait en japonais et en plusieurs langues européennes. En avril, il fut élu Vice-président de la Société d'investigations du cancer. En avril 1919, les universités Impériales du Japon ont été reformées par le gouvernement japonais et il fut choisi professeur de dermatologie et syphiligraphie. En juin, il fut décoré de l'ordre de Zuiho de 2^e classe. Il ne s'occupait pas seulement de son travail universitaire, mais se consacra aussi à d'autres travaux scientifiques jusqu'à 1926, année où il fut obligé de quitter sa chère université, puisqu'il avait atteint sa 60^e année.

Cependant il continua de s'occuper des problèmes de prophylaxie contre les maladies vénériennes et la lèpre. Aussi la littérature scienti-

fique du monde l'intéressait toujours.

Dans son "Histoire de la Syphilis", qui est pour ainsi dire le couronnement de ses travaux, il a bien mis en lumière l'origine de la syphilis et comment elle est répandue dans tout l'Orient. Cette œuvre n'a pas peu contribué à l'élever au rang des grands hommes de science de l'univers. Aussi l'Académie Impériale des Sciences du Japon n'a pas hésité à reconnaître son éminente valeur.

Sous le nom de lettre "Gakuken" il avait publié en langue chinoise des poésies japonaises et chinoise d'une haute inspiration et d'une incontestable valeur littéraire. Ce travail en beauté le passionna jusqu'à la fin de sa vie. Son "Itsuchū Shūyūki" (Voyage du monde en 1925) est son dernière œuvre, dont quelques pages ont été écrites dans son lit de mort.

C'est surtout grâce à lui que la dermatologie, la syphiligraphie et l'urologie se développèrent et furent appliquées au Japon. Ses collègues et disciples ont tâché de marcher sur ses traces et continuent son œuvre avec ardeur et éclat.

Titres, ordres et décorations.

- 1) Prof. Emérite à l'Université de Tokio;
- 2) Membre du Conseil Sanitaire du Ministère de l'Intérieur;
- 3) Docteur en Médecine h. c. de l'Université de Breslau;
- 4) Membre de l'Académie Impériale Allemande des Sciences Naturelles à Halle;
- 5) Membre Honoraire de la Société de Dermatologie de Berlin;
- 6) Membre Honoraire de la Société Italienne de Dermatologie et Syphiligraphie;
- 7) Membre Correspondant de la Société de Dermatologie de Vienne;
- 8) Membre Correspondant de la Société Française de Dermatologie et de Syphiligraphie;
- 9) Membre Honoraire de la Société de la Dermatologie Athénienne;
- 10) Membre Correspondant de la Section de Dermatologie de la Société Britannique Royale de Médecine;
- 11) Membre Titulaire de la Société de Dermatologie et de Vénérologie de Moscou;
- 12) Membre Correspondant de la Société de Dermatologie d'Amérique;
- 13) Membre Honoraire de la Société Dermato-vénérienne d'Odessa;
- 14) Membre d'Honneur de la Société Française de Prophylaxie Sanitaire et Morale;
- 15) Décoration: IV^e Ordre de la Couronne (Italie);
- 16) Chevalier de l'Ordre de Leopold (Belgique);
- 17) Commandeur du Grand Ordre d'Isabella (Espagne);
- 18) Second Ordre de Stanislaus (France);
- 19) Médaille du Couronnement (Angleterre);
- 20) Chevalier de l'Ordre de l'Étoile Noire (France);
- 21) Premier Ordre du Sacré Trésor (Japon).

Keizo Dohi †.

Keizo Dohi, senior of the order of the third degree of the Court; honorary professor of the Imperial University of Tokyo had suffered since June of this year from a serious liver-complaint and died on Friday, November 6th at 6,05 o'clock p.m. having completed his 65th year of age three and a half months before. He was born on the 20th of July 1866, being the second son of Sohaku Ishiwata, a physician in ordinary to the liege lord daimyo of Fuchū in Echizen; in his family the medical profession was hereditary.

In 1879 he left the elementary school of his native town and went with his brother to Tokyo, being a pupil of the high school until 1885. From the winter of 1885 till the winter of 1889 he was a student of medicine at the Imperial University of Tokyo, during which time he also prepared his first book entitled "Geka-Hanron" (General Surgery). In 1890 he became a volunteer assistant in Scriba's surgical clinics and in 1892 entered Daigakuin (postgraduate course) and studied under the directions of the Professors Miura, Uno, Murata and Sato general surgery and especially leprosy. In 1893 he started for his first trip to Europe for the purpose of studying medicine and went to the University of Heidelberg, studied at Czerny's clinics, visited the laryngologic polyclinics of Jurasz; studied histology at Ewald's institute; pathological histology at Arnold's and bacteriology at Ernst's. It happened at this time that the establishment of a chair for dermatology and syphilology in Tokyo was discussed and he was ordered to prepare himself for this position. In 1894 he went to Vienna and studied and worked as an assistant for two years under the directions of the celebrated specialist for dermatology, Prof. Kaposi, and Prof. Lang as a specialist for syphilology. He further visited for purposes of study Neumann's clinics and Finger's polyclinics as well as the pathologic-anatomical institute of Prof. Paltauf. In January 1896 he went to Italy to study pellagra but returned to Vienna after three months and went in June to Prague. In August of the same year he participated as a member of the Third International Dermatological Congress in London and on his way back he visited Russia's leprosy-settlements and got well acquainted there with some of the Russian professors. In November he returned to Berlin to investigate especially cystoscopy under Prof. Nitze. From Berlin he went via Riga and Koenigsberg

to Breslau, where he became a friend of Prof. Neisser and studied under his direction dermatology and syphilology. In 1897 he went to Paris to study under Prof. Guyon in the surgic-urological clinics, thus the foundation of the chair for dermatology, syphilology and urology at the Tokyo Imperial University was ripening to its first fruits. In June he went via Strassburg to Bern in Switzerland where he stayed for a few months with Prof. Jadassohn continuing his special studies. On October 11th, the day of the opening of the International Congress for Leprosy-Research in Berlin he took part as the representative of Japan and also published there his Studies on Histology of Leprosy which he had finished before in Bern. After the conference he returned to Paris and left that place on the 21st of November for Antwerp from where he went to Japan and arrived at Tokyo in January 1898. During this five years' travelling and studying in Europe he had enriched his knowledge and experience greatly and was promoted to be assistant professor at the Imperial University in Tokyo and later professor of dermatology and syphilology in February 1898. Owing to his abilities and his previous publications of scientific books he received the title of "Hakushi" in the following year. In April 1902 he went as an attendant to Prince Komatsu to England for the coronation of King Edward VII. of England. On his way he called on his colleagues in the universities and hospitals of Naples, Bern, Paris, Vienna, Breslau, Berlin and St. Petersburg and returned in September to Japan. On this trip he was received and decorated by the monarchs of different countries. In July 1910 he started again for Europe. Great changes had taken place in the theory and the treatment of dermatology and venereology; radium had been discovered and the practical use of the ultraviolet rays had begun; experimental syphilis was practised; the *Spirochaeta pallida* and the Wassermann's reaction had been discovered and also the wellknown medicine "606" had started its triumphal course all over the world. On September 13th he attended the International Congress of Natural Science at Koenigsberg at which he took part in the discussions referring to the above "606". He also attended the dermatological congresses, held in Berlin, Vienna, Paris etc. and acted as a delegate of the Imperial Japanese Government in February 1911 at the International Exhibition of Hygiene in Dresden where the diploma of honour was presented him for his improvement and production of moulages. Later on he also was invited as a guest to the meeting of the German Society for the Prevention of Venereal Diseases.

Meanwhile he was specially occupied by his investigations of serology and the phototherapy in Berlin, Paris and Brussels and on 19th of July 1911 he arrived in Tokyo again. During the trip he became an honorary member of different scientific institutes in Berlin, Paris, Vienna, Italy and Greece and a member of the committee of the editorial staff of the periodicals for dermatology and urology in Germany and France; he further was a member of the committee of the International Society for Syphilis-Prophylactic and was elected the president of the Japanese Society of Dermatology and the chief editor of the periodical dealing with the prophylactic of venereal diseases. On the 30th of January he was promoted to the first rank of higher officials; in June 1916 he celebrated his 25th anniversary as a M. D., on which occasion his friends and pupils collected all his works published by him up to that time and presented them to the scientific world; one year later they were published in Japanese and in several European languages. In April he was elected as a vice-president of the Society for Investigation of Cancer. In April 1919 the Imperial Universities in Japan were reformed by the Japanese Government and he was elected professor of dermatology and syphilology. He discovered several new skin diseases and found a new method of treatment suitable for Japan. He was invited as a guest of the Tokyo Imperial University in the 200th anniversary of the Russian Academy of Sciences and on his way for Spain he attended the Second Congress of the International Society for the Prevention of Venereal Diseases at Paris. After investigating the literature on the origin of syphilis at the National Library in Madrid, he returned to Japan in January 1926 via America. In 1926, he was obliged to retire from his beloved university, having reached his 60th year. Nevertheless he still worked at the problems of the prophylactic for venereal diseases and was greatly interested in medical history. The "History of Syphilis" was the most important fruit of his investigations and in this work he explains the origin of syphilis and how it was spread in the orient and it was acknowledged as a work of eminent value by the Imperial Japanese Academy of Sciences.

He also was well known as a Chinese poet under his pen name "Gakuken" and published different poems in the Chinese language; his most celebrated literary books are the "Gakuken-Yūgi" and the "Itsuchū-Shūyūki" (Trip around the World in 1925).

Just before his death the First Order of the Sacred Treasure

was bestowed upon him for his eminent scientific merits by the Imperial Court.

Titles, Orders and Badges.

- 1) Emerit. Professor of the Tokyo Imperial University;
- 2) Member of the Sanitary Central Board of the Imperial Japanese Ministry of the Interior;
- 3) M. D. h. c. of the Breslau University;
- 4) Member of the Imperial German Academy of Natural Sciences in Halle;
- 5) Hon. Member of the Berlin Dermatological Society;
- 6) Socio Onorario della Società Italiana di Dermatologia e Sifilografia;
- 7) Corresponding Member of the Vienna Dermatological Society;
- 8) Corresponding Member of the French Dermatological Society;
- 9) Hon. Member of the Athenian Dermatological Society;
- 10) Corresponding Member of the Dermatological Section of the British Royal Society of Medicine;
- 11) Titled Member of the Muscovite Dermatological and Venereological Society;
- 12) Corresponding Member of the American Dermatological Association;
- 13) Hon. Member of the Dermatological-Venereological Society of Odessa;
- 14) Membre d'Honneur de la Société Française de Prophylaxie Sanitaire et Morale;
- 15) 1902: The Fourth Order of the Crown (Italy);
- 16) 1902: Officer of the Leopold-Order (Belgium);
- 17) 1902: Commander of the Real Order of Isabella of Catiglia (Spain);
- 18) 1902: Stanislaus-Order Second Cl. (Russia);
- 19) 1902: Commander of the Black-Star-Order (France);
- 20) 1902: Coronation Medal (Great Britain);
- 21) November 1931: The First Order of the Sacred Treasure (Japan).

VIA SIBERIA.

Urban & Schwarzenberg
(Ergebnisse der gesamten Medizin)
Friedrichstrasse, 105 E
Berlin N. 24, Germany



土肥慶藏博士ノ訃

日本皮膚科學會ノ創立者ニシテ、本會名譽會頭タリシ、東京帝國大學名譽教授正三位勳一等醫學博士土肥慶藏先生ハ、昭和6年11月6日午前6時5分、麴町區下二番町46番地ノ自邸ニ於テ長逝セラレタ。御齡66。葬儀ハ11月10日午後12時30分ヨリ、青山齋場ニ於テ、増上寺ノ管長大僧正道重信教師導師ノ下ニ、佛式ヲ以テ嚴カニ營レ、次デ午後2時ヨリ3時半迄ノ間ニ、告別式ガ行ハレタ。

法名 智德院殿松譽壽光鸚軒大居士。

病狀經過竝ニ病理解剖所見大要。 昭和3年9月25日、鹽田外科ニ於ケル直腸癌手術後ノ經過ハ極メテ順調デ、同11月9日無事退院サレテヨリ約2年半ノ間ハ、何等ノ異狀モナク經過セラレタ。本年6月中旬以來、兎角健康勝レサセラレズ、時々下痢、腹痛竝ニ不定ノ輕熱往來スルニ至ツタノデ、専心療養ニ努メラレシモ、捗々シクナカツタノデ、8月下旬以來ハ引續キ臥床、稻田教授ノ指揮ノ下ニ、専ラ主治醫西牧學士ノ治療ヲ受ケラレタ。10月25日ニ1回嘔吐アリシ以來、時々惡心ヲ訴ヘ、更ニ腹水ヲ認メ、尿量モ次第ニ減少スルニ至ツタ。11月1日稻田教授立會ノ下ニ、近藤次繁博士ニヨツテ穿刺術ガ施行サレ、大量ノ透明ナル漿液ガ排除セラレテカラハ、頓ニ腹部ノ自覺症狀ハ輕快スルニ至ツタガ、惡心止マズ、食思進マズ、心力次第ニ衰弱シ、10月4日以來ハ橈骨動脈ニ於テハ脈搏觸レザルニ至ツタガ、意識ハ極メテ鮮明デ、家族、友人、門弟等病牀ニ列セル人々ニ對シテ、夫々最後ノ別レノ言葉ヲ交サレタ程デアツタ。11月6日ノ明方臨終ノ數時間前マデ、スベテノ應答ガ確實デアツタ事ハ、稀ニ見ル處デアルト、主治醫ノ人々が語り合ツテキタ。11月6日午前6時5分呼吸停止、心動モ停止シテ、遂ニ他界セラレタ。先生ノ生前ヨリノ意志ニ從ヒ、11月6日午後3時遺骸ヲ病理解剖ニ附セラレタ。解剖室ニハ佐藤(三吉)、入澤、近藤、吳、岡田、田代ノ名譽教授、藤浪京大名譽教授、多數ノ東大教授、助教授竝ニ門下生ノ多數ガ立會ツタ。先ヅ稻田教授ヨリ病氣ノ經過ノ報告ガアツタ後、緒方知三郎教授執刀ノ下ニ型ノ如ク解剖ガ進メラレタ。ソノ詳細ハ他日病歷ト共ニ報告セラレル筈デアルガ、其所見ノ大要ハ次ノ通りデアル。即チ先年手術ヲ受ケタル局所附近淋巴腺ニハ、肉眼的ニ癌腫ノ再發ト看做ス可キ何等ノ病變ヲモ發見セズ、主要ナル病變ハ肝臟ニ於ケル轉移デ、肝臟ハ其増殖ノ爲メニ著シク増大シ、ソノ下縁ハ臍窩ノ高サニ達シ、重量3090g。肝臟實質ハ殆ド全ク破壊セラル。膽囊中ニ指頭大ノ「コレステリン結石」アリ。腹腔内ニ淡黃色澄明ノ液體650ccヲ充タス。又右肺中葉下縁ニ指頭大ノ轉移性結節二三ヲ認メル。

病中見舞者ノ往來。 先生ハ堅ク病氣ノ事ヲ親族ノ方々ニサヘ祕セラレタ位デ、外部ニ發表スルノヲ好マレナカツタシ、病中ニ在ツテモ常ニ筆ヲ執ツテ、種々ノ雜誌ニ投稿セラレ、又乙丑周遊記ノ稿ヲ起サレ、且ソレヲ完成セラレタ。以上ノ次第デ、知己、友人、門下生ノ多クハ先生ノ病狀ガソレ程ニ切迫シテ居ルトハ考ヘテ居ナカツタ矢先ヘ、11月1日以來急ニ病勢ガ改ツタトイフ報告ヲ受ケテ、寢耳ニ氷ト驚カサレ、在京ノ人々ハ勿論ノコト、地方各大學教授ニシテ先生ノ門下生ノ人々ハ、遠近ヲ問ハズ先生ニ最後ノ訣別ヲナサントテ、遠クハ北海道、朝鮮

カラモ多數參集スル等、下二番町ノ土肥邸ハ一時ニ雜踏ヲ極メタ。

特ニ敍勳。先生危篤ノ報、天聽ニ達スルヤ、生前ニ於ケル先生ノ多年學界ニ盡サレタル效績ヲ嘉セラレ、特ニ勳一等ニ敍セラレ、瑞寶章ヲ賜ツタ。

葬儀竝ニ告別式ノ模様。11月10日ハ雨トイフ天氣豫報ヲ裏切ツテ、午前10時頃カラ日射が見エ出シ、正午ニハ小春日和ノ穩カナ天氣トナツタ。當日葬儀ハ葬儀委員長近藤次繁博士、總務部長關男爵、總務遠山、高橋兩教授、庶務部長竹内松次郎教授、接待部長山田弘倫博士、通信部長中野等博士、葬儀部長栗本庸勝氏、會計部長岡村龍彦博士等指揮ノ下ニ、極メテ盛大ニ且滞リナク行ハレタ。此日午前中ニ青山齋場ニハ先生ノ近親、友人、門下生、先生ノ生前最モ關係ノ深キ日本皮膚科學會、日本性病豫防協會、戊戌會ヲ始メトシテ、各學會、各團體等ヨリ贈ラレタル無數ノ花環ヲ以テ、所狹キ迄ニ式場内外ガ飾ラレタ。正午頃靈柩車ハ、僧侶、近親、葬儀委員等ノ10臺ノ自動車ニ護ラレツ、齋場ニ到着。次イデ親族席ニハ喪主健男氏、未亡人多越子夫人、土肥章司博士夫妻ヲ始メ、親戚一同着席。會葬者席ニハ小金井、佐藤、吳、岡田各東大名譽教授、林東大醫學部長、岡田、野間口兩海軍大將等ヲ始メトシ、故人ノ先輩、同僚、門下生等順次着席ノ上、12時30分ヨリ前記淨土宗管長大僧正道重信教師導師ノ下ニ嚴カニ讀經開始サレ、午後1時20分賀陽宮殿下ノ御代拜アリタル後、內務大臣、東京帝國大學總長、東京、九州、北海道、京城各帝國大學醫學部長、新潟、岡山、金澤、千葉、熊本、名古屋ノ各醫科大學長、日本皮膚科學會、日本性病豫防協會、日本泌尿器科學會、門人總代等ヲ始メトシ別項ノ如ク60通ノ弔辭及ビ600餘通ノ弔電ガ靈前ニ捧ゲラレタ。然ル後遺族ノ燒香ニ次イデ、會葬者ノ燒香アリテ、1時40分葬儀ヲ終了ス。更ニ午後2時ヨリ3時30分迄ニ一般會葬者ニ對スル告別式が行ハレタ。告別式ニ列セル人ニハ德川家達公、石黒子爵、倉富樞密院議長、フオレッチ獨逸大使等内外ノ諸名士ヲ始メトシテ極メテ多方面ニ互リ、ソノ數約3000ニ達シタノハ、近來稀ニ見ル盛儀デアツタ。告別式終了後、先生ノ遺骸ハ、同日午後4時30分幡ヶ谷火葬場ニ於テ荼毘ニ附セラレタ。遺骨ハ多摩墓地竝ニ郷里越前丸岡町白道寺ニ分納セラル、筈ノ由。

勅使ノ御差遣竝ニ皇太后宮ヨリノ御弔問。11月9日午後2時、畏キアタリヨリハ特ニ勅使ヲ土肥邸ニ差遣セラレ、幣帛竝ニ祭祀料ヲ御下賜ニナツタ。皇太后宮ヨハ病中竝ニ薨去ニ際シ、御見舞品ノ御下賜ガアツタ。

各宮家ヨリノ御弔問。尙 閑院宮殿下、伏見宮殿下、東伏見宮殿下、賀陽宮殿下ヨリハ、先生ノ病中竝ニ薨去ニ際シテ、特ニ御手厚キ御見舞ト御弔問トヲ賜ツタ。

弔辭。葬儀ノ際、先生ノ靈前ニ捧ゲラレタル弔辭ハ下ノ通りデアツタ。內務大臣 安達謙藏、東京帝國大學總長 小野塚喜平次、東京帝國大學醫學部長 林春雄、九州帝國大學醫學部長 田原淳、北海道帝國大學醫學部長 中村豐、新潟醫科大學長 富永忠司、岡山醫科大學長 田村於菟、金澤醫科大學部長 須藤憲三、千葉醫科大學長、熊本醫科大學長 山崎正董、名古屋醫科大學長、東北帝國大學醫學部代表 太田正雄、日本醫科大學長 鹽田廣重、京都帝國大學皮膚科代表 松本信一、日本皮膚科學會會頭 遠山郁三、日本性病豫防協會副會頭 栗本庸勝、

日本泌尿器科學會，日本黴毒學會頭 松本信一，門人總代 山田弘倫，日本皮膚科學會東京地方會，日本皮膚科學會大阪地方會，日本皮膚科學會仙臺地方會，日本皮膚科學會福岡地方會，日本皮膚科學會札幌地方會，日本皮膚科學會京城地方會，日本皮膚科學會新潟地方會，日本皮膚科學會岡山地方會，日本皮膚科學會金澤地方會，日本皮膚科學會長崎地方會，日本皮膚科學會熊本地方會，日本皮膚科學會名古屋地方會，日本レントゲン學會，癌研究會會長 長與又郎，社會醫學會 三田定則，日本性病豫防協會福井縣支部長縣知事 齋藤直橋，若越醫學會福井地方支部代表 柳下彦雄，日本俱樂部會長公爵 德川家達，景岳會長 加藤寛治，福井俱樂部 岡田啓介，日佛協會理事長 子爵曾我祐邦，學士會，醫學士會，同窓有志代表 吳秀三，佐藤外科同窓會，若越鐵門會，麴町區學士會，日本醫學士會代表幹事 立松啓三，財團法人武生郷友會會頭男爵 本多副恭，東京府醫師會，福井縣醫師會長 大月齊庵，東京市醫師會，福井縣南條郡醫師會長 岡部桂三郎，麴町區長，麴町區醫師會，十日醫會，麴町區教育會，麴町區民會，麴町區內小學校長 津田信雄，岡崎秀民等ノ諸氏。

日本皮膚科學會會頭遠山郁三氏ノ弔辭次ノ如シ。

本會名譽會頭東京帝國大學名譽教授醫學博士土肥慶藏先生薨去セラル。嗚呼哀シイ哉。先生ハ本會ノ生父母ニシテ，且ツ恩愛到ラザルナキ嚴父慈母タリキ。先生ハ明治33年12月同志ト諮リ，本會ノ前身皮膚科泌尿器科研究會ノ一私的會合タルヲ改メテ，嚴乎タル一獨立學會トナシ，其會長ニ選バレタリ。爾後年年ノ總會ニ於テ常ニ再選セラレ，幾回トナク固辭セラレタルニ拘ラズ，會員ノ熱望已ミ難ク重任ニ重任ヲ重テ，連綿27年間ニ及ベリ。其間一身一家ヲ忘レテ，斯學ノ爲ニ會務ヲ鞅掌セラレタルヲ以テ，本會ハ異常ノ發展ヲ遂ゲ，會員數モ日ニ倍蓰シ，基礎ハ全ク鞏固トナレリ。是レ蓋シ先生ノ眞摯ナル熱情ト學界ノ思潮ニ對スル明察ト學識ニ依ラズンバ，奚ンゾ能ク此效果ヲ舉ゲ得ンヤ。先生ガ本會ヲ指導シテ，機宜ニ適スル社會的貢獻ヲナサシメタル事業モ亦尠シトセズ。例ヘバ癩及性病ニ對スル國際的會議ト呼應シテ，是等國民病ノ豫防根絶ノ爲ニ，時ノ政府ニ建議スルコト數次，遂ニ豫防法案ノ制定，癩病院ノ開設ヲ見，公私檢黴制度ノ改善ヲ得タルガゴトキ是ナリ。先生ハ又本會ヲ通ジテ斯學ノ普及ヲ圖リ，終ニ本邦各教育機關ニ皮膚科學獨立講座設置ノ實ヲ舉ゲシメ，更ニ泌尿器科學講座獨立ニ關シテ努力スル所大ナリキ。明治34年3月皮膚科泌尿器科雜誌ヲ創刊シ，主筆タルコト今日ニ至ルマデ31年間，病勢甚シク進ミテモ猶ホ筆ヲ棄テズ，最大ノ努力ヲ拂ハレタリキ。特ニ他學會ニ卒先シテ，論著，本會及地方會ニ於ケル學術報告ニ歐文抄録ヲ附シ，海外諸學會ト通信ノ途ヲ拓カレタリ。其我邦ノ學術ヲ世界ニ紹介スルニ與リテ力アリシハ敢ヘテ絮說ヲ要セズ。實ニ先生ハ我國醫學ノ至寶ニシテ，芳名ハ夙ニ海外ニ重キヲナセリ。故ヲ以テ歐米各國ノ專門學會ハ競フテ先生ヲ名譽會員，通信會員等ニ推薦シ，其機關雜誌ニ共同編輯者タルコトヲ依囑シタリ。本會ハ昭和2年先生ノ主唱ニヨツテ組織ヲ改メ，社團法人トナルヤ，會員一同ハ先生ニ會頭トシテ指導シ賜ハラシコトヲ懇請セシモ，先生ノ謙讓ナル，固辭シテ容レラレズ。已ムヲ得ズ本會ハ滿場一致ヲ以テ先生ヲ名譽會頭ニ推薦シ，其高教ヲ仰グト共ニ，至大ナル功勞ニ對シ常ニ壽康ヲ祈リテ已マザリキ。然ルニ今ヤ圖ラズ世ヲ逝ラル。吾等再ビ先生ノ溫容ニ

接シ、其ノ愛撫ヲ受クル能ハズ、茫然自失言フ所ヲ知ラズ。唯冀クハ先生ノ偉大ナル事績ヲ繼承シ、今後益々發奮砥礪シテ、鴻恩ニ酬ヒシコトヲ期ス。英靈來リ饗ケラレヨ。聊カ蕪辭ヲ陳ベ、謹テ哀悼ノ意ヲ表ス。

ヤダッソン教授ヨリノ弔電。土肥先生逝去ノ報ニ接シ、プレスラウ大學教授ヤダッソン博士ハ獨逸皮膚科學會ヲ代表シテ、先生ノ御遺族宛ニ次ノ弔電ヲ寄セタ。Familie Dohi. Shimoni-bancho 46 Tokio. Herzlichste Teilnahme in treuer Verehrung des hochverdiensten Gelehrten. Deutsche Dermatologische Gesellschaft Jadassohn.

長崎ニ於ケル遙拜式。11月10日午後4時同市内淨土宗聖徳寺ニ於テ、長崎地方會主催ノ下ニ、遙拜式が行ハレタ。尙青木大勇博士ヨリ次文ヲ寄セラレタ。

故土肥慶藏先生ヲ悼ミテ。長崎ニ「センセイゴキトク」ノ急電ガハイッタノハ、11月4日ノ午後9時過デアッタ。夜ノ明ケルノヲ待ツテ倉皇醫大教授駒屋博士ヲ自邸ニ訪ヒ、熟談ノ上氏ハ急行テ急遽上京御見舞ヲ申上ルコトニナリ、私ハ止ツテ皮膚科學會長崎地方會ノ當面ノ會務ヲ處理スルコトニナツタ。「六ヒゴゼン六ジ五フンセンセイゴセイキヨ」ノ悲報ガ、イカニ當地ノ東大出身醫大各教授ヲ始メ、市内外ノ各會員及緣故者ヲ驚愕悲嘆セシメタカハ、眞ニ言語ニ盡シ難イモノガアル。嗚呼、我々ノ心カラノ祈モ、昊天ノ無情ナル、遂ニ先生ニ壽ヲ假サズ、空シク偉大ナル先生ノ一生ノ幕ハ悲シクモ閉ヂラレタノダ。頻々トシテ來ル駒屋教授ヨリノ急

報ハ、御葬儀ガ10日ニ營マル、コト、御宗旨ガ淨土宗ナルコトヲ明カニシタ。

10日ノ午後4時市内ノ淨土宗聖徳寺ニ開カレタ先生ノ告別式ニハ、讀經、燒香、記念撮影ノ後、私が地方會ヲ代表シテ、僭越ナガラ微忱ヲ展ベルコトニナリ、



長崎市聖徳寺ニ於ケル遙拜式

齊々肅々ノ間ニ、阿部、角尾兩醫大教授及同窓田中民夫氏等ノ思ヒ出多キ追憶談ガアツテ、皮膚科教室渡邊清博士ノ挨拶ガアリ、偉人ノ追慕ニ今更ノ如ク暗涙ニ咽ビツツ散會シタノハ、先生ノ生前畏敬サレタシーボルト師ヲ祭レル鳴瀧ノ山々カラ薄暮漸ク迫ラントスル時刻デアッタ。コヽニ載セタノハ當日映ツタ御別レノ記念寫真デアアル。偉大ナル先生ヲ英靈ニ對シ、私ノ

如キモノガ悼詞ヲ陳ベルノハ餘リニ恐縮デアル。併シ長崎地方會ヲ代表シテ御靈前ニ申述ベタコトヲ、更ニ茲ニ筆ニスルコトヲ御許シ下サツタナラバ、ドンナニカ私ノ光榮デアラウ。先生ノ御出身及公ノ官、學歷ニ就テハ、既ニ既ニ餘リニ周知ノコトデアリ、亦斯學ニ致サレタ功績ニ就テハ、之ヲ傳ヘルニ他ニ人モアルコトデアルカラ、茲ニハ之ヲ省略スルコトニシテ、希クハ私ヲシテ思ヒ出多イ先生ニ對スル追慕ノ一端ヲ茲ニ語ラセテ頂キタイ。先生ニ私が肇メテ御目ニカ、ツタノハ、明治34年熊本ニ開カレタ第9回九州醫學會ノ時デアツテ、當時先生ハ31年ニ歸朝サレタ後ノ3年ヲ過サレ、東京帝大皮膚科教授トシテ、將又日本皮膚科學會ノ會長トシテ、日夜草創時代ノ斯學ノ爲ニ渾身ノ精力ヲ傾注シテ居ラレタ時代デアツタ。同會ニ東大カラ出席サレタノハ、先生ト耳鼻科ノ岡田和一郎博士ノ兩先生デアツテ、コノ兩先生ガ來賓席ニ竝ンデキラル、所ヲ觀ルト、何レモ新進氣鋭ノ少壯良教授トシテ敬意ヲ表スルニ充分デアツタガ、岡田先生ハ豪宕磊落、意氣滿堂ヲ壓スル慨ガアリ、先生ハ重厚端嚴、演者ノ一言一句ヲモ苟ニサレナイト云フ風ガアツテ、此所ニ面白イ「コントラ」ストヲシテ居ツタ。先生ノ演題ハ「日本ノ癩病ニ就テ」ト云フノデアツテ、24年御卒業後スクリーバ外科教室ニ居ラレタ時代ニ、大學院學生トシテ研究サレタモノニ、後更ニ歐洲ニ於テ研攻サレタモ現ヲ追加セラレタモノデアラルシク、其論旨ハ癩斑ノ進ミタルモノニ巨態細胞ヲ認ムルヨリ考フルト、斑紋癩ガ結節癩ニ移行スルノハ、當然臨牀上アリ得ベキコトデ、コレガ菌ノ直接的作用ニ基ク以上、ウンナ等ノ主張スル「ノイロレプリード説」ハ當ラズト指說セラレ、又其傳染ト流行ニ就テ、癩ハ勿論傳染病デアルケレドモ、其素因ハ癩患者ノ血統ニ存シ、其子孫ノ身體ハ、病菌ノ蕃殖ニ適當スル培養基ヲナスモノデアルト信ズベク、結節癩ノ多キ邦ハ癩流行ノ初期ヲ意味シ、神經癩多キハ其病毒ノ漸ク微弱トナリタルコトヲ示スモノデアルト、三十有餘年前ノ遠キ既往ニ於テ、既ニ此病理觀ヲ道破サレテ居ツタノデアル。同會デ私が述べタノハ、「臺灣ノ皮膚病ニ就テ、竝ニ本島蕃人ノ喚ンデ「ホーリス」ト稱スル一種ノ皮膚病ニ就テ」ト云フ題デ、ホンノ臺灣デ觀タ熱帶性皮膚病ノ二三ニ就キ其實驗報告ヲシタト云フニ過ギナカツタガ、ソノ時分カラ先生ハ熱帶性皮膚病ノ研究ニハ大ニ興味ヲ持ツテキラレタヤウデ、自分ハコレカラ天草ト五島ニ行キ、象皮病ヤ「フィラリヤ病」ヲ視察シテ十數日後ニハ東京ニ歸ルカラ、是非敎室ニ來ルヤウニトノ御厚意ガアツタ。ソレデ上京後敎室ヲ御訪チシタラ、研究上ニツキ御手厚キ御指導ト御懇遇ヲ辱フシ、又當時ノ醫局長デアツタ故九大敎授旭博士ヤ、現在ノ東大敎授遠山博士及土肥章司博士ナドカラ、ナニカト御厚情ニアヅカツタ。私ハソレマデハ臺灣總督府臺北醫院ノ外科部長デアツタ後ノ京大耳鼻科敎授和辻春次博士ノ部下ニアツテ、現在ノ慶大產婦人科敎授川添正道博士等ト共ニ外科ヲ研究シテ居ツタノデアルガ、先生ニマミエテ後、肇メテ皮膚科ヲ以テ學界ニ立ツ決心ガ出來タノデアツテ、今日ドウヤラコウヤラ皮膚科デ立ツテ行ケルノモ、全ク先生ノ御蔭ト深ク肝銘シテキル次第デアル。爾來コ、ニ三十有餘年、其間ニ先生ノ御薰陶ト御恩顧ニ浴シタコトハ、眞ニ筆紙ニ盡シ難イモノガアル。然ルニ計ラズモ、毫モ御酬ヒモ出來ズニ、今茲ニ此悲シキ永遠ノ御別レニ遇ントハ、誠ニ悲シトモ哀シトモ嘆カン言葉モナイ。特ニ思ヒ出深キハ、大正15年秋10月第30回九州醫學會ガ當地ニ開カレタ時デアル。先生ハ特別講演者ト

シテ同會ニ出席セラルベク、神戸カラ上海丸ノ客トナリ、15日曉過グル頃、細雨ヲツイテ上陸サレタ。3日間ノ崎陽御滞在ハ歴史ト美術ニ興味深イ先生ニハ、假令何等ノ御歡待ガ出來ナカツタトシテモ、幾分カノ御感興ヲソヘ得タカニ思ハレル。駒屋教授ガ『メツタニナイ先生ノ御機嫌ダ』ト喜ンダノモ眞實デアル。赧愧ニ堪ヘナカツタノハ、案内役タル我々殆ンド史料ノ知識ト美術鑑賞ノ心得ガナカツタコトデアツタ。併シ幸ニ解剖ノ國友、高木兩教授ガ揃ヒモ揃ツタ玄人筋デ、其衝ニアツテ下サツタ爲ニ、ヤツト重荷ヲ下スコトガ出來タ。先生ガ最モ翹望サレテ居ツタノハ、偉聖シーボルトノ鳴瀧ノ屋敷跡ヲ訪ハル、コトデアツテ、先生ノ御遺著『長崎ノ3日』ノ中ニモ、『鳴瀧ノ地ヲ訪フコトハ今回ノ目的ノ一ツデアツタ』ト記ルサレテキル。御供シタノハ、三宅、駒屋、根岸、北村、渡邊ノ諸博士ト私ノ6人デ、櫻町デ自動車ヲ降り、鳴瀧川ノ谿流ニ沿フテ溯リ、徒歩同屋敷ニ辿リツイテ、先ヅ門前ノ碑文ヲ讀ミ、ソレカラ胸像前ニ額イタ。感慨無量ノオモザシヲ以テ、颯爽タル英姿ヲ仰ガレタ時ノ先生ノ御感想ハ、次ノ御遺詠ニ瞭カデアツテ、俯仰低徊暫クハソレヲ去ラウトハサレナカツタ。數畝荒丘一經通 仰看英像立秋風 東漸醫學濫觴地 長在肅條灌莽中。先生居常謹嚴、公私ヲ明カニシテ容易ニ人ニ許サレナカツタ。爲ニ謬ツテ親シミ難キ人トナシ、或ハ尊大自ラ持スル甚ダ高シナドノ評ヲ耳ニシナイコトモナカツタガ、コレハ淺薄者ノ妄言デ、一タビ先生ニ親ミ就ケルモノハ、異口同音皆先生ガ眞摯篤實、友誼ニ厚ク、又後學ニ懇切誘掖到ラザルナキヲ頌ヘナイモノハナイ。宜ナル哉、先生ノ門下ヨリ出デタ俊髦ハ、今ヤ天下ニ周ク、先生ノ爲ニ報效ノ誠ヲ盡サント競ツテキル。嗚呼近代日本ノ肇メテ生ンダ偉大ナル先生ハ今ヤ亡ク、思ヘバ想フホド惜シイトモ哀シイトモ、感慨愈々切ニ、タゞ追憶ノ涙ニ咽ブノミデアル。



奉天奉天寺ニ於ケル遙拜式

福岡ニ於ケル遙拜式 11月21日ニ福岡地方會開催、劈頭高木教授ハ土肥先生追悼ノ辭ヲ述べ、先生ノ御寫眞ヲ飾リ、地方會トシテノ遙拜式ヲ催シタ。

奉天ニ於ケル遙拜式 11月10日午後1時(東京時刻午後2時)御葬儀ト同時刻

ヲ期シ、滿洲醫科大學皮膚科教室主催トナリ、淨土宗奉天寺ニ於テ、故恩師ノ遙拜式ヲ行ツタ。

